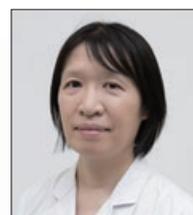


当院における漢方診療の実際

漢方治療のニーズがますます 高まるこれからの医療

—呼吸器内科・女性外来における漢方診療の実際—

和歌山労災病院 呼吸器内科 部長／働く女性健康研究センター長、女性専用外来 辰田 仁美 先生



1990年 和歌山県立医科大学医学部 卒業
1992年 和歌山県立医科大学医学部附属病院 第一内科 入局
1997年 国保日高総合病院
1999年 市立貝塚病院
2001年 和歌山労災病院 呼吸器内科
2015年 働く女性健康研究センター長 兼務

1966年に開設された和歌山労災病院は、2004年に和歌山県内初の地域医療支援病院の指定を受け、「地域の人々と勤労者に、地域医療機関と密接に連携しつつ、安全に十分配慮した最適な医療を提供する」を理念に掲げている。2009年に現在地に新築移転後、2012年には災害拠点病院の指定を受けており、今や地域における重要な医療拠点病院と位置づけられている。

呼吸器内科部長の辰田仁美先生は、ご専門の呼吸器内科だけでなく、働く女性健康研究センター長として女性専用外来の責任者としてもご活躍であり、日々の診療に積極的に漢方治療を組み入れておられる。今回は辰田先生に、呼吸器内科領域および女性専用外来における漢方診療の実際と、これからの医療における漢方の役割について伺いました。

地域医療に貢献する呼吸器内科

当科では、常勤医師3名と非常勤医師1名で日々の診療を行っています。新型コロナウイルス感染症(コロナ)の感染拡大の影響で一時期、受診患者数は減少していましたが、現在はコロナ禍前の水準に戻っています。加えてコロナ禍で検診の受診を控えていた方が多かったため、最近では肺癌の患者さんが増加傾向にあります。当科ではこの他に気管支喘息、COPD、非結核性抗酸菌症、睡眠時無呼吸症候群や間質性肺炎などの患者さんが多く、さらには比較的重症のコロナ感染患者さんの診療にもあたっています。

当院は「地域医療支援病院」の指定を受けており、当科でも地域の先生方との密接な連携を推進しています。地域の先生からの紹介患者さんの診療はもちろんですが、普段は地域の先生が診療され、当科で年に数回の検査を受けていただくというように地域の先生方とコラボレーションしながら診療している患者さんもいらっしゃいます。

当院は「断らない救急」を基本に救急科の先生が非常に精神的に診療されていらっしゃるのですが、救急外来の受診や搬送されてくる患者さんで肺炎による呼吸不全や熱

発の患者さんなどの診療も含め、地域の医療と密接に連携しています。

補剤を中心に幅広く漢方治療を実践

当科では西洋薬による治療を基本としつつも、漢方治療も積極的に組み入れています。特に補剤を使用する頻度が高く、肺癌やCOPD患者さんのフレイル、非結核性抗酸菌症など、その使用範囲は多岐にわたります。

補剤の中でも使用量が多い処方が補中益気湯です。その理由に補中益気湯の飲みやすさがあります。漢方治療においては漢方医学的に患者さんの病態を把握し、患者さん個々に適した処方を選択することが基本であることは言うまでもないのですが、以前に貧血の傾向がある患者さんに十全大補湯を処方したところ、服用を拒否された経験がありました。それまでは漢方薬を服用した経験がなかった方で、飲みにくさを感じられたようです。しかし、補中益気湯ではそのような患者さんを経験したことはほとんどありません。そこで私は、補剤を使いたいが漢方薬の服用経験がない患者さんには補中益気湯から治療を開始し、漢

方薬に慣れてきたら証に応じて人参養栄湯や十全大補湯に切り替え、患者さんが服用を嫌がられるなら補中益気湯に戻すというような使い方をしています。何よりも漢方薬を服用していただくことが重要だからです。

もちろん、補剤をベースに置いた治療だけでなく、短期的に症状の改善を目的に使用する漢方薬も多数あります。具体的には、各種の検査で咳喘息や肺癌などが否定された咳嗽の患者さんに、通常の鎮咳薬に加えて麻杏甘石湯や麦門冬湯、半夏厚朴湯などを使用しています。

当科では、補剤を筆頭に20種類近くの漢方薬を使用しています。西洋薬のみでは治療に難渋しても漢方薬が有用なケースもあり、漢方治療は患者さんにとっても医師にとってもメリットは大きいと思います。

女性専用外来の概況と開設の経緯

私は呼吸器内科が専門ですが、2003年5月に和歌山県内で初めて開設された「女性専用外来」の責任者でもあります。開設当初は女性の疾病の早期発見を目的とした初診専用外来でしたが、漢方診療を熱心になさる産婦人科の先生が中心となって漢方外来を始められたことから、患者さんのニーズに応える形で再診も行うようになりました。現在では女性医師6名の体制で診療にあたっています。

私が漢方治療を始めるきっかけとなったのは女性専用外来でした。熱心に漢方診療をされていた産婦人科の先生が他院へ異動され、私がお後任として否応なしに漢方の勉強を始めたという経緯があります。当時は業務の負担が増えて大変でしたが、実際に漢方薬の効果を強く実感するようになり、今では当外来だけでなく呼吸器内科でも積極的に漢方治療を組み入れています。

当外来は完全予約制で、初診患者さんには30分の枠を確保しています。患者さんの平均年齢は54.6歳(令和3年度)で更年期障害が絡む患者さんが多いですが、不眠や片頭痛、むくみ、冷え症、尿失禁など、多種多様な訴えを有する患者さんが受診されています。

受診に至る経緯も様々です。ご自身が漢方薬の服用を希望されて受診される方や当外来のWebをご覧になって受診される方、メンタル面での不調を抱えている方で心療内科を受診する前に当外来を受診される方、あるいは地域の先生から検査では異常がなくても不調を訴える患者さんを紹介していただくケースなどです。

女性専用外来における漢方診療の実際

当外来では、更年期障害の三大処方である当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸はもちろんですし、喉の詰まり感に半夏厚朴湯、冷え症に当帰四逆加呉茱萸生姜湯や真武湯、めまいの患者さんに苓桂朮甘湯、半夏白朮天麻湯な



(辰田仁美先生 提供)

ど、数多くの漢方薬を使用しています。

月経困難症に対して桂枝茯苓丸、更年期障害のイライラに対して加味逍遙散などを奏効例として経験しています。また、頭痛、不眠症に加えて食欲不振といった多愁訴を有する患者さんに六君子湯から治療を開始したところ、他の症状も改善し、種々の薬剤が不要になったというような著効例も経験しています。

当外来では現在も振り分けの機能を有しており、たとえば、だるさを訴える患者さんで甲状腺機能がかなり低下しているようなケースなどは専門の診療科に紹介しています。このように当外来では、まずは全身を診て、専門の診療科の診療が必要ないと判断されれば漢方で治療を進めます。特に最近では、心療内科領域の治療ニーズが高く、漢方治療で改善する場合には当院で治療を続けますが、専門医による診療が必要と判断された場合には心療内科と当外来に通院していただくという患者さんもいらっしゃいます。

女性外来の理想的なあり方は、性差医療・医学の十分な知識を踏まえたうえで、患者さんにきちんと対応することです。私自身はまだその理想には到達していませんが、たとえ検査では異常所見がなくても苦痛を抱えているような方に漢方治療を組み入れることで、少しでも患者さんに寄り添いたいと思っています。

さらに高まる漢方治療のニーズ

呼吸器内科領域では、高齢化の進展に伴ってフレイル・サルコペニアの観点からの治療がより重要となります。その点で、補剤を中心とした漢方薬の役割は大きいと思いますし、今後、漢方薬の活躍の場は大きいと言えます。

また、女性専用外来では心療内科領域における漢方治療のニーズがより高まっている印象があり、これからは心療内科的な漢方の使い方を勉強して、そのような患者さんにもご満足いただける診療をしたいと考えています。

取材：株式会社メディカルパブリッシャー 編集部 写真：行友重治